

薬用植物園かわらばん

いま、こんな草木も楽しめますよ！
草木に囲まれ心も体もリフレッシュ…



2020年
6月1日
第92号

ハマボウフウ（セリ科）

管理棟前の第二圃場で、散形花序に白い小花が密生している姿が見られます。東アジアの海岸に自生する多年草で、日本でも北海道から沖縄までの海岸の砂地でよく見られます。根、根茎を原料として、生薬、浜防風（ハマボウフウ）になります。漢方医学では、辛温解表、祛風湿薬の防風（ボウフウ）の代用品として使用されます。ハマボウフウの若芽や新芽は刺身のツマや味噌和え、天ぷらにして食べますので、八百屋の店頭にも出て、「八百屋防風」の名もあります。根の煮だし液は風呂に入れると湯冷めしないとも言われています。また、正月に吞む屠蘇にも配合されることがあります。

ところで中国では、ハマボウフウの根は「北沙参」という別の生薬となり、祛痰止咳、清熱薬として、慢性気管支炎、肺結核、口喝などに用いられています。



キハダ（ミカン科）

園の真ん中あたり、案内板のすぐ後ろで花芽が見られますが、私は花が開いたのを見たことが無いので、今年はぜひ見たいと思っています。北海道から九州の山地に分布する雌雄異株の落葉高木です。7月頃に15～20年生の木を伐採して皮を剥ぎ、コルク層（周皮）を除くと、その内側に鮮やかな黄色の層が見られます。これが生薬、黄柏（オウバク）となります。黄色のアルカロイド、ベルベリンのほか、粘液質を含み、たいへん苦いです。

漢方医学では清熱解毒を目的に黄連解毒湯や七物降下湯などに、民間では苦味健胃、整腸薬として陀羅尼助や百草丸などに配合されるほか、消炎薬として下呂膏や歯磨き粉にも配合されています。

また、食薬区分で果実は「食」に分類されているため、果実を原料にした飴も市販されています。

今、こんな草木が楽しめます！！